反社会性と非社会性

——テレビのなかの「オウム真理教事件」——

村　上　淑　恵

"Anti-Social" and "A-Social"

News of the *Aum Shinrikyô* Incidents on Television

MURAKAMI Yoshie

Abstract : In this paper, I criticize a theory of "the similarity" between news-shows and *waido*-shows, or entertainment information shows, by investigating their differentiation and mutual reference through the news of the *Aum-Shinrikyô* incidents in 1995.

I compare materials taken from "*News 23* (hereafter, *23*)" as examples of the news-shows and "*Sûpâ*-waido (hereafter, *Waido*)" of the *waido*-shows.

The results of my examination on the differences of the two information shows are as follows :

① "*23*" − process explanation/"*Waido*" − condition explanation

② "*23*" − logical, evidential/"*Waido*" − emotional, personal featuring

③ "*23*" − the *Aum* as terrorist organization/"*Waido*" − the *Aum* as group of insane people in delusion

④ "*23*" − the *Aum* as a dangerous threat to the nation-state and the legal system/"*Waido*" − the *Aum* as a bizarre threat to the civil society

"*23*" focuses on the *Aum*'s criminality, and "*Waido*" on the *Aum*'s strangeness through various details they have obtained. It has been pointed out that the news-shows describe the "anti-social" aspect of the *Aum*, while the *waido*-shows stress the "a-social" aspect of the *Aum*. However, this seeming differentiation tacitly gives the audience more "information plausibility" through the mutual reference mechanism that I would emphasize. News-shows make the audience believe that "such bizarre people would commit those crimes", at the same time the *waido*-shows strengthen the impression that "those crimes would be committed by such bizarre people". This may not be done by an apparent intention of the mass media, but by the consequence of mutual reference that occurs among massmedia.

1　はじめに

1995年の東京地下鉄サリン事件発生当時，テレビ，新聞，雑誌等あらゆるマスメディアでサリン事件，およびそれに関連する一連の「オウム真理教（以下オウム）事件」が報じられた。過去10年間のワイドショーで最も多く放送された話題はオウム事件だという調査結果[1]もあり，一連の事件が当時どれほど関心を集めていたかがわかる。

多様な番組での長時間にわたる報道にもかかわらず，それらの報道内容を詳細に検討した研究はこれまでなかったと思われる。さまざまな論者がオウム報道を論じてはいるが，そのほとんどは，記者やジャーナリスト自身が自社／他社の報じ方（特にワイドショーや週刊誌に対して）を「過剰報道」あるいは「過剰演出」だと反省，批判するものが多い[2]。つまり，ジャーナリストとしての姿勢を問うものが中心なのであ

る。

一方で，このオウム事件から「報道のワイドショー化／ワイドショーの報道化」が決定的になったと主張する論者もいる。たとえば村上直之は，「オウム＝サリン事件に見られる〈報道パターン〉の成立はすでにその10年前にさかのぼる」（村上1990：225頁）として，ロス疑惑事件とグリコ・森永事件[3]を「象徴的に表現されたニュースと娯楽の収斂化現象にほかならない」と指摘している（村上1990：230頁）。ロス疑惑事件は，週刊誌やワイドショーが先行して事件化されたものであり，マスメディアは容疑者自身のみならず家族のプライバシーまで暴き立てた。それは「芸能ニュースや娯楽番組の枠（制作部門）の中で行われたもの」であり，「〈芸能の報道化〉とでも呼ぶべき現象」であった（村上1990：227頁）。一方グリコ・森永事件は，「ニュース報道機関は犯人と警察と市民という三者の間を取りもつ“狂言回し”の役柄を嬉々としてまことに楽しげに演じた」として，「〈報道の芸能化〉と名づけるにふさわしい」と論じている（村上1990：228頁）。つまり，村上の説明によると，「〈芸能の報道化〉と〈報道の芸能化〉とは，現代のマス・メディアが報道部門と制作部門という本来互いに異質な領域において，その表現形態をホモロジカルに収斂させつつあるという構造的特徴の現象面を指摘したもの」なのである（村上1990：229頁）。

また石田佐恵子は，1990年代には報道ニュースとワイドショーの境界が曖昧なものになったと主張している。石田によると，ニュースは「効果音やBGMを多用したドラマ仕立ての表現形式，各局こぞっての報道特番を連発することでワイドショーに接近し，ワイドショーは取り扱う題材のうち“社会関連ニュース”の比率を増してきたという点で報道ニュースに接近」していった（石田1998：113頁）。「情報の見せ物化」が進行し，「従来異なる切り口で現実について語っていた“報道ニュース”と“ワイドショー”というそれぞれの表現形式が境界を失い，合体して拡大し続けている」とも指摘している（石田1998：114頁）。

同様の見解は，1980年代にジャーナリズムは衰退し，ニュースもおもしろおかしくストーリーとして作り変えられ，ニュースとワイドショーの境界線は存在しなくなったという，川邊克朗の主張にも見られる[4]。このような「ニュースのショー化」や「ニュースとワイドショーの境界がなくなった」といった主張は，オウム報道に限らず，マスメディアについての批評や批判の中ではしばしば見受けられる。しかしそのほとんどは，ニュースとワイドショーの番組内容を実証的に分析したものではないように思われる。

もっとも，実証的な研究がないわけではない。たとえば，萩原滋たちはテレビニュースの娯楽化傾向を検証するとして，1997年に放送された各局のニュース内容を分析している（萩原1999）。その調査では，ニュース内容を「ソフト」「ハード」「バイオレント」に分類し，項目数と時間量に基づいてそれぞれの構成比を求めている[5]。その結果，「ソフトニュース」が番組の中で全体に高い比重を占めていることが明らかになった（萩原1999：26頁）。また，BGMや音響効果の利用が大幅に増加し，視聴者の注意をひくためのテロップ使用などの工夫がなされているとも指摘している（萩原1999：27頁）。つまり「ソフトニュース」の増加と演出効果の増大をもって，「娯楽化」が語られているわけである。ここでの「娯楽化」は，我々の関心からすれば「ワイドショー化」と読みかえても差し支えないだろう（萩原1999：7頁）。しかし，萩原は夕方以降のニュース番組だけを対象にしてその娯楽化を指摘するにとどまり，もともと娯楽性が高いと思われるワイドショーとの内容比較は行っていない。

村上や川邊たちが主張するように実際にニュースとワイドショーは境界を失い，収斂しているのだろうか。萩原が指摘したようにニュースがワイドショー化しているのだろうか。このような立場から考えると，ニュースとワイドショーの事件や事故の伝え方が類似してきていることになる。また石田が主張するように，「同じ切り口で現実を語って」いるとするならば，出来事に付与する「イメージ」も両者の境界が失われていることになるだろう。しかし実際に放送された番組を見てみると，どうもニュースとワイドショーが伝えた「オウムイメージ」は共通しているとは言えないようである。

そこで本稿では，ニュースとワイドショーが伝えた「オウム像」の異同という問題について，両者の実証的な比較によって論じる。また両者の比較を通じて，ニュースとワイドショーがどのような関係にあるのかについて考えていく。

2　対象とする番組および分析の手順

本稿で具体的に分析するのは，TBS系列のニュース番組『ニュース23（以下23）』とワイドショー番組『スーパーワイド（以下ワイド）』である。分析する期間は，最も報道が集中した1995年3月22日の上九一

色村強制捜査初日から，同年5月15日の麻原代表逮捕前日までの月曜から金曜の放送分とする[6]。

『23』は，筑紫哲也がメインキャスターをつとめるニュース番組であり，現在も放映が続いている。月曜から金曜のたいてい午後11時ごろから放送され，放映時間は約1時間程度だが，特集などによって時間は若干異なる[7]。ニュースは冒頭の20～30分の間で報じられ，オウム報道もこの枠内で扱われている。そして，ニュースの後は必ずスポーツや天気，特集などの各コーナーへと続く。この時期には，青島幸男東京都知事の誕生などオウム以外の話題も豊富にあったが，扱われてもせいぜい5～10分程度で，番組のほとんどをオウム報道が占めている。本稿で実際に分析した『23』の日数は35日であり，1日平均約25分の放送時間とすると合計約875分となる。

次に『ワイド』は，亀和田武，宮崎総子，宮沢祐介の3人がレギュラーキャスターをつとめる午後2時から4時までの2時間番組である。夕刊紙の見出し紹介やニュースコーナーを毎回もうけているが，それらもほとんどオウムに関連した話題を扱っており，2時間ほぼ全部オウム報道に費やしていると言える。この『ワイド』は後にTBS問題[8]で終了する。実際に分析した『ワイド』の日数は33日であり，1日平均約100分（CMを除いた時間）だとすると合計約3300分となる。

TBS系列の番組のみを今回の分析対象とする理由は，いくつかある。まず，制作者側（放送局自身）が「ニュース／ワイドショー」という区別を採用していることが，少なくともTBSに関しては明白にわかるからである。というのも，TBS問題をきっかけにして，昼のワイドショー番組である『ワイド』は放送の打ち切りを余儀なくされ，朝のワイドショー番組（『モーニングEye』）は事件や事故を扱わない主婦向けの生活情報番組（現『花まるマーケット』）へと生まれ変わった。朝と昼のワイドショーを打ち切ることによって，TBSはワイドショー番組そのものを一掃したのである。一方『23』は，現在までメインキャスターを変えることもなく番組自体も続いており，放送される内容を見る限りは，大幅に構成やコンセプトを変更することもなかったように思われる。同じオウム事件を積極的に取り扱っていた両番組のこの顕著な違いは，放送局自身がニュースとワイドショーの性格が異なるものだと認識していたことを示唆する。制作の面から見ても，ニュース番組は報道局，ワイドショー番組は情報局というように，扱う部門がそもそも違うということもある。また，同一局の番組を比較することで，放送局のカラーの相違を排除することができ，ニュースとワイドショーとの違いをいっそう明瞭にできると考え，今回はTBSのみに限定した。

番組を分析するにあたって，本稿では以下のような手順をふんだ[9]。まず録画されたVTRすべてに目を通し，それぞれ両番組の日付，番組中の大・小キャプション，登場人物（スタジオゲスト，インタビューそれぞれ）や大まかな番組内容あるいは発言内容を書き留め，必要な部分はそのつど個別に聞き起こした。そしてキャプションごとに区切った一覧表を日付順に作り，両番組の指向性に着目した。ここではキャプションを区切りの目安としたが，必ずしもキャプションごとで話題がきれいに分類できるわけではない。実際には，複数のトピックが一つのキャプションに含まれることもあった。しかし他に目安がなかったため，本稿ではキャプションごとに区切ることとし，番組を紹介する場合はキャプション名で表すこととする。なお，本稿の分析のもととなった番組内容の一覧表については，筆者論文「テレビのなかの“オウム真理教事件”（資料）」（『甲南女子大学研究紀要　人間科学編』第39号　49–76頁）を参照していただきたい。

3　報道の流れ

この節では，『23』と『ワイド』の内容の流れを概観する。両番組とも，事件の発生と捜査の進展に追随する形で番組内容が構成されている。萩原滋が1990年のニュース番組に関して，その日の主な出来事に焦点を合わせた「デイリーニュース」が番組の中で最も高い比率を占める点を明らかにしているが（萩原1992），オウム報道においても，その日に起こった出来事を中心とする傾向がある。

オウム事件では，いわゆる「本件」と言われる地下鉄サリン事件以外にも，さまざまな事件が発生している（表1参照）。警察庁長官狙撃事件や横浜駅異臭事件，オウム科学技術省大臣刺殺事件などの大きな事件だけでなく，4月中旬以降は末端信者の微罪逮捕を含むと，ほぼ連日のように逮捕者がでている。それら逮捕者の氏名や容疑内容，逮捕場所の報告や強制捜査押収品の紹介だけでも，番組のかなりの時間を占める。事件や出来事の概要（誰が，どこで，どうしたなど）だけで，時間枠が埋まるのである。このような事件や出来事の豊富さ，あるいは事件関係者の人数の多さはオウム事件報道の特異性でもあるだろう。したがっ

表1　オウム関連事件年表

1995/3/20	東京地下鉄サリン事件
同年 3/22	上九一色村強制捜査（昏睡信者発見）
同年 3/30	警察庁長官狙撃事件
同年 4 月	教団幹部の逮捕（4/12, 4/13, 4/20, 5/3）
中旬～	→微罪逮捕も含めるとほぼ毎日逮捕者がでている
同年 4/14	オウム子供を児童相談所へ保護
同年 4/18	横浜駅異臭事件
同年 4/23	オウム科学技術省大臣刺殺事件
同年 4/28	東京総本部火炎瓶投てき事件報道（事件発生は同年 3/19）
同年 5/05	新宿青酸ガス未遂事件
同年 5/16	麻原代表逮捕
遡って，坂本弁護士事件（1989 年 11 月），波野村騒動（1994 年），松本サリン事件（1994 年 6 月），宮崎資産家拉致事件（1994 年 6 月），目黒公証役場事務長拉致事件（1995 年 2 月）など	

て，この時期だけでは番組の関心や論点の時間的な移り変わりを見るのは難しい。

しかし両番組ともこの時期は，サリン事件とオウムとの関係に関心が集中していることでは共通している。もともとオウム強制捜査の捜査令状上の容疑は，1995 年 2 月 28 日東京で起きた目黒公証役場事務長拉致事件であった。にもかかわらず，番組の中ではサリン事件と比較すると，拉致事件への言及は明らかに少ない。確証のないこの時期に，両番組では，サリンとオウムをどのように結びつけて番組構成をするかに焦点があることは指摘できるだろう。

4　ニュース番組とワイドショー番組の内容比較

この節では，両番組の内容の違いを具体的に明らかにする。とはいえ，これは必ずしも両者が全く異なる情報を視聴者に伝達していることを意味するわけではない。放送時間をみればわかるように，『23』は約 25 分間，『ワイド』は約 100 分間であり，両者にはオウム報道にさかれた時間と情報量に圧倒的な差がある。したがって，おおむね『23』で取り上げた話題は，『ワイド』でも扱うことになる。前節で述べたように，その日に起きた共通の出来事や事件が中心となるので，同じ話題になるのはむしろ当然である。とはいうものの，一方の番組でしか扱わない話題もあり，同じ話題においてもどの面を強調するかという点は異なる。ここではもっぱら両番組の特徴や傾向に注目し，両者の差異をより明白にすることを目的とする。

(1) 経緯指向／現状指向

一つ目に『23』は経緯指向，『ワイド』は現状指向という傾向がある。これは中継場所の違い，あるいは情報の伝え方・演出の違いである。

例えば，『23』ではほとんどが記者クラブや捜査本部からの中継で，上九一色村や道場といった現場からの中継は少ない。逆に『ワイド』では上九一色村や各道場，現場からの中継が多く，番組の最初と最後に 1 日 2 回必ず各現場につないでいる。もちろん『23』でも各道場や上九一色村から中継することもあるが，毎回ではなく，強制捜査初日や教団幹部が刺殺されたとき，麻原代表逮捕直前など特別な出来事が起きた場合に限られる。同様に『ワイド』でも記者クラブや捜査本部から中継するが，これも強制捜査初日や警察庁長官狙撃事件など，大きな事件が起きたときである。どちらからの中継を多く利用し，何をどのように伝えようとしているかが両番組では異なるのである。

記者クラブや捜査本部からの中継では，起きた出来事の経緯や概要を伝えている。いつ，どこで，誰が捕まって，それは何の容疑だったかといった経緯である。『23』では記者クラブや捜査本部前から中継することによって，報道した内容の情報源は警察であり，より「冷静な」あるいは「公式な」情報だということを醸し出すのである。

一方，上九一色村や事件現場からの中継では，現在何が起きているか，どのような様子かといった現状を伝える。捜査員は今どこを捜索して，何が押収されているのか，信者の様子あるいは現場の雰囲気といったものである。『ワイド』では現場から中継することによって警察発表からは伝えきれない臨場感を与え，リポーターに現場での印象を語らせ，報道している内容が，より「生の」あるいは「ホットな」情報であると暗示するのである。したがってこれらのことから，『23』は経緯指向であり，『ワイド』は現状指向であるといえるだろう。

(2) 論理（物証）指向／感情（人物）指向

二つ目に，『23』は論理（物証）指向，『ワイド』は感情（人物）指向であるといえる。『23』では，押収薬品やサリン製造機といった物証について詳しく紹介している[10]。押収された薬品類の名称を具体的に列挙し，通常の使途を解説し，使用目的についてのオウム側の主張も大きくとりあげる。写真やフリップなどを用いて，押収薬品類でのサリン生成法を説明し，有機化学の専門家や業者による薬品の解説も詳細である。

つまり，オウムがサリンを製造することが可能であり，出てきた物証（薬品類やプレス機）とオウムがサリン事件に関与している可能性の間に，論理的な整合性があるとほのめかすのである。たとえば，5月15日に放送された『23』では，以下のような報道がなされている。

（『23』5・15　新事実！これがサリン製造機）

ナレーター：これがオウム真理教が購入したサリンの生成が可能な装置だ。高さ2メートルあまりとかなり大きい。インクの自動配合装置と名づけられているが，値段は4000万円。コンピュータ制御でどのような薬品でも調合，合成できる高性能な機械だ。硫酸など，どのような強い薬品を入れても大丈夫なように機械の内側には金やプラチナ，腐食に強い高硬度ステンレス，ハッセロイなどが使われている。また化学反応で危険なガスが発生しても外に漏れないよう接合部は極めて精密に接合され，バルブやパッキングなどは通常では使用しない最高級のものが使用されている。バルブ一つが50～60万円。パッキングも一つ4～5万円である。部品の半分以上はスイス製，その他ドイツやフランスなどから部品が輸入され，これに日本製の部品を加えて日本で製作されている。この4枚の書類は自動配合装置を製作，販売している神奈川県の会社が作った装置の基本設計図。会社側はこの基本設計図を入手した西山さんに装置についてこう説明した。

西山祥雲（総合問題解析協会）：これはサリンを作る場合においては，そのマニュアルを知っておればあの機械でできるんですかと。そら当然のことで，いつでもできますよということです。オウムのものもそうですよとはっきり言いましたね[11]。

このように写真を用いて装置の性能を詳しく解説し，これならサリン生成も可能であると明言はしないけれども示唆するのである。一方『ワイド』では，押収薬品については名称などの簡単な説明だけであり，フリップを用いたサリン生成法の解説はなく，サリン製造機の写真も扱っていない。特徴的なのは，被害者や遺族の悲しみあるいは心情を取り上げる点である。その顕著な例として，葬儀の場面をあげることができる。

（『ワイド』3・24　無差別殺人！地下鉄サリン事件Aさん（放送は実名）涙の葬儀！）

ナレーター：死者10人，負傷者5000人以上だした地下鉄サリン事件で，通勤途中事件に遭遇，帰らぬ人となった埼玉県草加市に住むOL，Aさんの葬儀告別式が今日午前営まれました。今日の葬儀もやり場のない怒りと深い悲しみに包まれていました。

（途中　略）

レポーター：悔しいお別れになってしまった。

父親：ええ，もうねぇ。何て言っていいかわかんないですよ，もう。もうなんか眠れないしねぇ。なんかあの子がひょっと帰ってくるんじゃないかと思って。犯人がね，一刻も早く捕まってもらって，それがあの子の供養になるんじゃないかと思ってます。

勤務先の社長：ほんとに亡くなった方かわいそうでね。元気な方でね。風邪ひいてて熱がでても咳しながらでも，休みなさいと言ってもがんばり屋さんでね。

レポーター：悔しくて悲しくて，またAさんが帰ってくるような気がするといって毎日眠ることができなかったという父親のBさん（放送は実名），そして母親のCさん（放送は実名）。またお姉さんを帰してほしい，犯人を殺してやりたいとそう話していた弟のDさん（放送は実名）。これが本当に最後のお別れです。今，棺がゆっくりと動きだしました。Aさんはこのあとヤツカ葬場で荼毘に付されます。

これらを通じて伝わるのは，サリンという得体の知れない不気味なものを浴びせられて死んでしまったこと，またそれによって家族や友人がどれほど悲嘆にくれているかである。葬儀の場面を扱うことによって，サリンはいかに恐ろしい毒ガスで，オウムはどれほど残虐な集団であるかが感情的に訴えかけられるのである。このようなサリン被害者の葬儀の話題は，『23』では扱われていない。

また『ワイド』では，オウム内部の生活実態についてかなり関心が強く，元信者のインタビューも多い。『23』では元信者のインタビューは4月に4回，5月に2回と合計6日間にわたって取り上げ，一方『ワイド』では3月に4回，4月に9回，5月に5回と合計18日間に及んでいる[12]。両番組の取り上げた日数の差から見ても，『ワイド』では元信者の証言によるオウム教団の生活実態の暴露にいかに力点を置いていたかがうかがえる。ここで4月20日に放送された『ワイド』の一部を紹介しよう。

（『ワイド』4・20　子供を返せ！！オウム母親緊急会見に元信者修行の実態を暴露！）

ナレーター：十分な教育をほどこしていると主張する教団側。施設から逃げ出した元信者は悲惨な生活を悪夢のように振り返ります。両者の言い分はまったく違うのです。

オウム外報部長：幼児に関しては，食事の回数は1日3回。小学生以上が2回になります。われわれの考え方は回数は3回であろうが2回であろうが1日の必要摂取量，栄養の必要摂取量これはきちっと守る必要があると。

表 2　インタビュー対象者の比較

ニュース23					スーパーワイド			
5月	4月	3月	インタビュー対象者			3月	4月	5月
なし	2回	1回	現役信者	オウム信者	オウム関連企業	1回	2回	1回
なし	1回	なし	信者子供		信者子供	なし	2回	なし
					現役信者	なし	9回	5回
					オウム幹部7名	3回	8回	2回
なし	1回	なし	信者の元勤務先	信者関係者	信者の元勤務先・元同僚・学校関係者	1回	4回	1回
1回	3回	なし	信者の友人・知人		信者の友人・知人	2回	2回	4回
なし	1回	なし	信者の付近住民		信者の家族	1回	9回	5回
なし	なし	1回	麻原代表の家族（弟）		信者の付近住民	なし	1回	4回
					麻原代表の家族（弟）	1回	なし	1回
					麻原代表の元勤務先マッサージ店主	1回	なし	なし
なし	1回	なし	サリン被害者	被害者・元信者	サリン被害者	1回	2回	1回
2回	4回	なし	元信者		サリン被害者の父親	1回	なし	なし
なし	2回	なし	元信者の家族		サリン被害者の勤務先社長	1回	なし	なし
					サリン被害者の親友	1回	なし	なし
					元信者	4回	9回	5回
					元信者の家族	なし	1回	なし
					仮谷清志さんの家族	なし	1回	なし
					坂本さちよ（坂本弁護士の母）	なし	1回	1回
					被害者の会（信者の肉親が結成）	なし	2回	なし
					警察庁長官狙撃事件の付近住民	1回	なし	なし
					警察庁長官の長男	1回	なし	なし
なし	3回	なし	上九住民・竹内精一	住民	富沢町住民・遠藤文夫	1回	1回	なし
1回	1回	1回	オウム施設付近住民		上九住民・竹内精一	3回	4回	2回
					オウム施設付近住民	2回	7回	3回
					長野県住民	なし	なし	1回
なし	1回	なし	児童相談所所長	識者・専門家	児童相談所所長	なし	2回	なし
2回	1回	なし	常石敬一（神奈川大教授）		滝本太郎（弁護士）	1回	1回	2回
1回	なし	1回	津田哲也（銃兵器評論家）		神浦元彰（軍事評論家）	なし	1回	なし
なし	1回	なし	下里正樹（ジャーナリスト）		江川紹子（ジャーナリスト）	なし	3回	2回
1回	1回	なし	有田芳生（ジャーナリスト）		島田裕巳（日本女子大助教授）	1回	なし	なし
なし	1回	なし	浅見定雄（東北学院大教授）		遠藤誠（弁護士）	なし	なし	1回
なし	1回	なし	心理学者（アメリカ）		伊藤芳朗（弁護士）	なし	1回	なし
なし	1回	なし	大槻義彦（早稲田大教授）		焼却炉専門家	なし	1回	なし
なし	1回	なし	井上順孝（國學院大教授）		航空関係者	なし	1回	なし
1回	なし	なし	上島啓司（関大教授）		常石敬一（神奈川大教授）	なし	1回	1回
なし	1回	なし	自衛隊OB		有田芳生（ジャーナリスト）	なし	1回	5回
					大林高士（ジャーナリスト）	なし	3回	なし
					岩上安身（ジャーナリスト）	なし	なし	1回
1回	なし	1回	ロシア軍関係者	ロシア政府				
1回	なし	なし	ロシア内務省					
1回	なし	なし	ロシア国防省					
1回	なし	なし	目撃者	その他	目撃者	1回	5回	2回
なし	1回	なし	一般市民		消防庁職員	1回	なし	なし
1回	なし	なし	見物客		横浜駅利用者	なし	1回	なし
1回	なし	なし	土産物屋		横浜駅異臭事件収容先病院	なし	1回	なし
なし	1回	なし	駅員		新宿駅駅員	なし	1回	なし
なし	1回	なし	薬品業者		長野県検問警官	なし	なし	1回
1回	なし	なし	不動産業者		青酸カリ業者	なし	1回	なし
なし	1回	なし	プレス機メーカー		不動産業者	なし	2回	なし
なし	1回	なし	元カルト信者（アメリカ）		フィルター販売業者	なし	1回	なし
なし	1回	なし	ベオグラード現地人		赤坂ビル管理人	なし	1回	なし
なし	1回	なし	ニコラテスラ博物館館長		レンタカー会社	1回	1回	なし
なし	1回	なし	徐（オウム幹部刺殺事件容疑者）知人		貸別荘管理人	なし	1回	1回
2回	なし	なし	関西系暴力団員		オウム経営鉄工所元従業員	なし	1回	なし
1回	なし	なし	ディレクター		七尾港	なし	1回	なし
1回	なし	なし	プロダクション関係者		石川県ホテルフロント	なし	2回	なし
					三浦漁港	なし	なし	1回
					三浦半島リゾートホテル支配人	なし	なし	1回
					三浦半島フェリー会社・乗組員	なし	なし	2回
					富士宮市食料品店関係者	なし	なし	1回
					オウム施設付近の定食屋	なし	なし	1回
					ニコラテスラ博物館館長	なし	なし	1回
					接触した自衛官	なし	1回	なし
					オウム治療省大臣にはねられた母子の夫	なし	なし	1回
					オウム関連会社求人募集に来た人	なし	1回	なし
20回	36回	5回	総回数：61回、総種類：40種類		総回数：192回、総種類：62種類	31回	101回	60回

レポーター：今日は何を食べましたか？
信者子供：ハンバーグと麺とからあげ。
元信者：ハンバーグといっても肉じゃないんで，大豆で作られてるもので普通とは違うんですけど。腐って，夏場はほとんどのものが腐ってるんですけど，カビはえたりとか。腐ってるものは教祖のエネルギーが入ってるので絶対残しちゃいけないって言われるんですよ。
（途中　略）
元信者：汚いなんてもんじゃない。ほんっとに汚いですよ。裸足で歩いて，私たちは汚いからスリッパで歩いてたんですけど，外と同じような状態なんですよ。砂ぼこりとダニもたくさんいますし，掃除ってのはほとんどされてない感じ。掃除したの見たことないですから。

このように『ワイド』からは，オウムでの生活がいかに不衛生で悲惨なものかが伝わってくる。また，修行で薬物を飲まされた証言，棺桶や骨つぼの目撃，母親と子供が別々に生活しているといった話題を取り上げることで，オウムがいかに非常識か，我々の生活とかけ離れているかを示唆している[13]。他にも，麻原代表やオウム幹部などの人物像についても頻繁に取り上げ，出身地から学歴や職歴，友人・知人や近所の評判はもちろん，学生時代の文集やイラストまで紹介している[14]。オウム信者は子どもの頃は真面目で良い子だったという近所の評判を紹介することによって，エリートで挫折を知らずに育った若者が奇妙な宗教にひっかかったというステレオタイプな説明をほのめかすのである。

インタビュー形式自体が多いのも『ワイド』に特徴的である。インタビューを取り上げる回数については『23』は61回，『ワイド』は192回と『ワイド』の方が約3倍多い（表2参照）。またインタビュー対象者の種類では『23』は40種類，『ワイド』は62種類となっており，『23』と比較すると『ワイド』の方が多岐にわたっている。

特に信者関係者へのインタビューの内訳に注目してみると，『ワイド』はオウム信者の元勤務先や友人・知人，付近の住民だけでなく信者の家族へもインタビューを行い，サリン被害者に関しては，当事者のみならずその父親や親友にまで及ぶ。オウムと取引のあった業者では，『23』では薬品業者，不動産業者，プレス機メーカーを取り上げている。一方『ワイド』では青酸カリ業者や不動産業者，赤坂ビル管理人，レンタカー会社，貸別荘管理人，オウム経営鉄工所元従業員にとどまらず，オウム信者が利用したと思われる港の関係者やホテルのフロント，食料品店，定食屋などに至る。そして『ワイド』では坂本弁護士の母，狙撃された警察庁長官の長男や被害者の会など，いわゆる「被害者」を対象にインタビューをしており，彼らの考えや心情を伝えている点が特徴的なのである。

『ワイド』が取り上げるような家族や知人あるいは目撃者，近所の住民などのインタビューでは，教団やオウム信者に対する周囲の評価，幹部たちの性格，それにまつわるエピソードなどに焦点を当てる傾向がある。一方『23』でのインタビューはオウム信者の経歴（出身地や学歴など）は紹介するが，家族へのインタビューはなく，友人や付近住民へのインタビュー回数も『ワイド』の半分以下と少なく，人物そのものへの関心は薄いことが読みとれる。

このように『23』では薬品類やサリン製造機に焦点をあて，『ワイド』では被害者やオウムの生活実態に関心をもつという両番組の傾向と，扱ったインタビューの数や種類，さらに人物像への関心の違いなどから考えると，『23』の方が論理（物証）指向であり，『ワイド』の方が感情（人物）指向だといえるだろう。

(3) 目的をもった「テロ的組織」／妄想にとりつかれた「狂気的集団」

三つ目に，『23』ではオウムを明確な目的（国家転覆）をもち，軍事的・政治的な「テロ的組織」だというイメージを喚起させる傾向を指摘できる。一方『ワイド』は，教祖によって信者は洗脳され，妄想にとりつかれた「狂気的な集団」だというイメージを彷彿とさせる傾向がある。

『23』ではロシアや自衛隊とオウムとのつながりに関心が高く，特に軍事的な面が押し出されるような番組構成になっている[15]。たとえば，ロシアでの射撃ツアーや軍事訓練を取り上げ，インタビューもロシアの内務省報道官や国防省幹部などに実施している[16]。このようなロシア政府関係者へのインタビューは『ワイド』では一切取り上げられない。自衛隊との関係についても，サリンと結びつくエピソードを紹介し，自衛隊幹部候補生学校で指導していた元幹部にインタビューしている[17]。つまり『23』では明言はしないけれども，オウムは国家転覆のために自衛隊やロシアと結びついたテロ的組織であると想起させる構成となっているのである。

一方『ワイド』でも，ロシアでの射撃ツアーやKGB教本の購入などについて取り上げるが，軍事的あるいは政治的なつながりよりもむしろ，拉致手段を学ぶた

めあるいは逃亡先としてロシアを関連づけている[18]。自衛隊については，元自衛官信者の家族にインタビューを実施しているが，話題はもっぱら彼の教団での悲惨な生活ぶりに限定され，オウムと自衛隊との軍事的・組織的なつながりにはふれていない[19]。

麻原代表個人については，『ワイド』では一般信者との生活ぶりの違いを取り上げ，豪遊ツアーや尊師接待マニュアルが存在したことなどを紹介している[20]。これらは『23』では全く言及されない話題である。これらのトピックによって，麻原代表がいかに一般信者とは異なる贅沢な生活を送っていたか，絶対的な権限をもっていたかが浮かび上がってくる。つまり，教団は，軍事的なテロ組織というよりは，絶対的な教祖に洗脳された狂気的な人々の集まりというイメージを暗示する番組構成なのである。

そして『23』と『ワイド』の違いが顕著なのは，覚醒剤についての報じ方である。両番組の内容を比較してみよう。

（『23』5・11　証言オウム覚せい剤を密造）

筑紫哲也：オウム真理教への強制捜査では様々な薬品が押収されましたが，その中には覚醒剤の材料となるものが大量に含まれておりました。こうした中で私どもはオウムが覚醒剤を作って資金源にしていたという有力な証言を得ました。オウム真理教をめぐる新たな疑惑です。

ナレーター：この写真，オウム真理教が作った覚醒剤の現物だとある人は言う。オウム真理教の強制捜査で覚醒剤の原料フェニルアセトニトリルが押収された。一方，大阪で逮捕された元関西系暴力団員の信者が覚醒剤を所持していたのが見つかった。オウムが覚醒剤を作り，暴力団に売っていたのではないかという疑惑が浮上。こうした中，証言したのは関西系暴力団の現役幹部である。

関西系暴力団幹部：あの一，作っていたことは事実ですね。関東のですね，ある組織に流れていたことは事実です。

（途中　略）

有田芳生：教団ができたときからそういう話ありまして，たとえば熊本県波野村に進出するときに暴力団に手助けしてもらったとか，富士山総本部の土地を買ったときに武闘派といわれる暴力団との関係も取りざたされてたわけですから。教団の発足当初からそういう噂はずっとありますね。

（途中　略）

筑紫哲也：一種のその，別の国家だからってのはさっき供述にありましたが，そうすると本物の国家との間の戦争をやろうと。一種の国家転覆といいますか，そういうものを考えてたということになるんですかね。それにしてもこの事件ってのは謎の部分が多いですよね。

（『ワイド』5・5　薬漬けオウム覚せい剤常用か脱走信者の髪から反応？）

ナレーター：かねてから信者に対しての薬物投与の疑いがもたれていたオウム真理教。イニシエーションと呼ばれる儀式で得体の知れない液体を飲まされて意識を失った信者も多いという。こうした中，教団施設から脱出した信者らの毛髪から教団内での覚醒剤疑惑が浮上した。ここにきてオウム真理教の覚醒剤疑惑が浮上したわけだが，それを裏付けるように覚醒剤の原料であるフェニルアセトニトリルが施設内から押収された。昏睡やかく乱を引き起こす薬物反応も信者から出ている。さらに劇薬のチオペンタールナトリウムで記憶を消していた疑いももたれている。

（途中略）

元信者：気持ち悪くなって，とにかく周りでもうめき声が聞こえてきまして。助けて下さい助けて下さいと訴えても大丈夫ですからって言われて。意識がだんだん薄らいでいく中で私は自分が死んでいくビジョンを見たんです。息ができなくなってきて苦しくて苦しくて死んだっていうところで私は気絶をしてしまったんです。

ナレーター：こうした証言からも教団は何らかの薬物を使い，信者を洗脳しやすい状態にしていたものと思われる。

このように『23』では，覚醒剤を資金源あるいは暴力団とのつながりとして伝え，インタビューも元暴力団関係者に行い，覚醒剤を経済的な手段あるいは「闇」の象徴と位置づけている。一方『ワイド』では，覚醒剤を洗脳に関連づけ，薬物を使用された元信者（被害者）から証言をとっている。覚醒剤や薬物によって，いかにその元信者が恐怖を感じたかが伝わるような番組構成なのである。

さらにオウム諜報省大臣が利用していた逃走ルートと逮捕場所についても，『23』と『ワイド』ではとらえ方が異なる。両番組とも，逃走ルートについてはNチェック（ナンバー読みとり機械）を避けるためではないかと最初に解説するが，その後に『23』では付近に警察の弾薬保管施設があることに触れており，テロの可能性を想起させるが，『ワイド』では大菩薩峠という名前が「仏教っぽい」とその土地名に話題が及び，宗教的側面を強調するのである[21]。

以上みてきたように，ロシアや自衛隊とのつながり，覚醒剤の使用と暴力団との関連，逃走ルートと弾薬施設との結びつきなどを示唆している点から考える

と，『23』はあくまでオウムを「国家転覆をもくろんだテロ的組織」だと強く疑っていることがわかる。すなわち，社会の危機を引き起こす「組織」だと暗示しているのである[22]。一方『ワイド』は，教祖の独裁性あるいは一般信者との生活ぶりの違いや，覚醒剤と洗脳の手段との関連づけなどの点から考えると，信者もある意味では被害者であり，「教祖の妄想にとりつかれた狂気的集団」と認識していることがわかる。すなわち，家族や生活への危機を引き起こす「人々の集まり」だと示唆する報じ方なのである[23]。

(4)「反国家的」組織／「反家族的」集団

四つ目に，『23』はオウムを「反国家的な組織」として，『ワイド』はオウムを「反家族的な集団」として暗示する傾向がある。『23』では行政の対応として，解散請求や宗教法人法の改正の動きについて取り上げている[24]。ここで，4月25日に放送された『23』を見てみよう。

（『23』4・25　解散請求へ準備開始）

ナレーター：青島新都知事は今日午後，就任あいさつのため与謝野文部大臣を表敬訪問し，オウム真理教に対する宗教法人解散請求問題を話し合いました。

青島新都知事：関係諸官庁と連絡を密にしながら，誤りなきをきしたいというのが基本姿勢でございます。

ナレーター：会談では関係省庁と連絡を密にして文部省と東京都が協調していく方針を確認しました。この後，与謝野文部大臣は文部省，法務省，警察庁，東京都の四者が一体となって解散請求に必要な書類を整えていくとして，具体的な作業を開始することを明らかにしました。

池田裕行：解散請求といっても，これは宗教法人の資格を剝奪するだけのもので，また請求，即解散かといえば色々と時間がかかるようです。

与謝野文相：いざ解散請求という実務をやる段階になりますと，やはり裁判所にきちんと説明をしなければならないですから。

ナレーター：早くから与謝野文部大臣はオウム真理教幹部が殺人罪，殺人予備罪などで起訴されれば，解散請求すべきとの考えを示していた。では請求すればすぐ解散となるのだろうか。今の流れでいうとオウム真理教を宗教法人と認証した東京都庁が所轄庁として東京地方裁判所に解散を請求する。これを受けて裁判所は非公開の審議を行い，公共の福祉に反すると判断すれば解散命令を出すが，宗教法人法はオウム真理教側がこの命令を不服として抗告する権利も認めている。つまり東京高裁や最高裁で再審もありうるわけだ。その場合，解散命令は執行停止だ。また仮に抗告せず，解散命令が成立しても今度は教団の財産をめぐる混乱は避けられそうもない。山梨県上九一色村にあるオウム教団施設の土地のほとんどはオウム真理教名義になっており，解散の事態になれば，国や地方公共団体に処分されることになる。

『23』では青島東京都知事や与謝野文部大臣の発言を紹介し，解散する場合はどのような手続きや問題があるのかを具体的に説明している。このような国や行政による法的な対応は，『ワイド』では扱われていない話題である。

逆に『ワイド』では，信者の家族の反応やインタビューを多用し，3月に1回，4月に9回，5月に5回と合計15日間に及ぶ。番組内では，教団幹部の母親の「自首してもらいたい」という発言を紹介し，オウム信者でいることから生じた迷惑や家族の心情を伝えている[25]。またインタビューの中で信者の肉親は，オウムに入信してからは音信不通となり，家族関係が壊れたと訴えている。一方『23』では，麻原代表実弟へのインタビューを3月に1度放送するにとどまり，教祖以外の現役信者に関しては，元勤務先や友人・知人へのインタビューは4月に4回，5月に1回と合計5日間扱っているものの，信者の家族に対するインタビューは全く取り上げていない。

このように『23』は国や行政の法的な対応を取り上げ，都知事や文部大臣の発言を紹介することによって，オウムを国家や法律を脅かす危険な組織として位置づけ，「反国家的」組織だと印象づけるような報じ方をしているのである。一方『ワイド』では家族の悲しみのインタビューを紹介することによって，オウムを市民生活や家族を脅かす異様な集団として位置づけ，「反家族的」集団であるとほのめかすのである。

5　ま　と　め

(1) メディアはオウムの何を伝えたか―反社会性と非社会性

以上みてきたように『23』と『ワイド』では，①経緯指向／現状指向，②論理（物証）指向／感情（人物）指向という違いがあり，オウムをどのような集団だと示唆しているかについては，③目的をもった「テロ的組織」／妄想にとりつかれた「狂気的集団」，④「反国家的」組織／「反家族的」集団という違いがあることがわかった。

この違いをまとめてみると，『23』はオウムの「反社会性」，つまりオウムがいかに日本社会や法を揺る

がす存在であるかを匂わせる番組構成になっていると言える。オウムは法律に違反し，国家転覆をたくらむ「反社会的テロ組織」であることが浮き彫りにされるのである。一方『ワイド』は，オウムの「非社会性」，つまりオウムがいかに社会にとって異質な集団であるかが伝わる構成になっていると言える。オウムは家族や地域社会に迷惑をかける「非社会的な狂気的集団」であると想起させるのである。

『23』では，オウムがサリン事件を起こすことが可能かどうかに焦点を当てることによって，オウムの「反社会性」を浮かび上がらせる。薬品の詳細な解説を行い，オウムの軍事的側面としてロシアや自衛隊との関係を取り上げる。またオウムを「反国家的」存在として，国や行政の対応なども報じる。それらの話題によって，結果としてオウムの行った組織的・テロ的側面が浮き彫りにされる。したがって『23』の中でのオウムとサリンの関係は，オウムというテロ組織による国家転覆のための「手段」としてのサリンであると読みとれるのである。

一方『ワイド』では，オウムがいかに奇妙な集団かという部分に焦点を当てることによって，オウムの「非社会性」が照らし出される。薬物投与や独特の修行方法，一般信者とは異なる麻原代表の生活ぶりなどを紹介することで，結果的にオウムの非常識ぶりが強調される。どのような人々の集まりかという人物像に対する興味が大きく，信者の家族や被害者，地元住民などの反応を取り上げる。オウムを「反家族的」存在として，信者や被害者の家族の悲しみを伝える。これらの話題が配置されることによって，結果としてオウムの奇妙さ・狂気的側面が浮き彫りにされる。したがって『ワイド』の中ではオウムとサリンの関係は，これほど奇妙なことばかりしている集団だからサリンのような危険なものも撒きかねないといった，奇妙さの「象徴」としてのサリンであると読みとれるのである。このように『23』はオウムの「反社会性」を，『ワイド』はオウムの「非社会性」をそれぞれが強調するような仕組みになっているのである。

(2) ニュースとワイドショーの相互参照関係

実際に放送された『23』と『ワイド』を見ていくと，「反社会性」と「非社会性」というそれぞれに異なるオウムの側面が浮かび上がるような番組構成であることが明らかになった。これまで主張されてきたニュースとワイドショーの類似や収斂といった現象よりもむしろ，番組内容を比較すると，ニュースとワイドショーはそれぞれ異なるオウム像を視聴者に提示する傾向が顕著であった。前節でも取り上げたように，同じ「覚醒剤」という話題でも，ニュースは資金源や「暴力団とのつながり」と，ワイドショーは「洗脳の手段」と関連づけて紹介した。また「サリン」については，ニュースでは「薬品の性質や所持の違法性」と，ワイドショーでは「遺族の悲しみ」と結びつけて報じた。このようにさまざまな話題が配置されることによって，ニュースではオウムの「反社会性」という面が，ワイドショーではオウムの「非社会性」という面が浮かび上がる構成になっているのである。

しかもニュースとワイドショーは，単に異なる側面を強調してオウム事件を報じるだけではなく，そこには相互参照の関係があると考えられる。ニュースではサリンという毒ガスはこのような薬品から生成され，このような性質があって，それは法に触れる行為なのだと伝える。あるいは，オウムは薬品類を大量に購入し，実験を行うようなテロ組織であり，また修行と称して拉致監禁を行う犯罪集団であり，宗教法人法を改正しなければならないと匂わせる。これらによって，オウムの「違法性」ないしは「犯罪性」が前面に押し出される。このようにニュースは，ワイドショーでは「非社会性」として扱われる部分を法に照らして，「反社会性」が強調される番組づくりになっているのである。他方ワイドショーでは，サリンを浴びると死んでしまい家族が悲しい思いをする，家族や社会に迷惑をかけるとんでもない集団だと匂わせる。あるいは独特の修行や生活について取り上げることで，オウムではこのようなひどい目にあうと暗示する。これらによって，オウムの「異常性」や「奇妙さ」が浮き彫りにされる。このようにワイドショーは，ニュースでは「反社会性」として扱われる部分を感情に訴え，「非社会性」が強調される構成なのである。

つまり両者は互いに参照しあうことによって，互いの情報の「もっともらしさ」を得るのだと考えることができる。ニュースの情報はワイドショーの情報に補完されて，「あれだけ奇妙な人たちならば，こんな犯罪もやりかねない」という印象を視聴者に与える。またワイドショーの伝える内容は，「あれだけの犯罪は，やはりこれほど奇妙な人々でないとやれない」というふうに補われるわけである。このような関係はメディア自身の意図というよりは，むしろ視聴者に及ぼす効果として，両者が相互補完的な構図になっているといえるだろう。

このような相互参照の関係においては，疑問の余地

がない閉じられた因果関係の物語が成立する。オウムの「犯罪性」がその「奇妙さ」によって納得させられ，逆に「奇妙さ」は「犯罪性」によって補強される。説明が循環し，閉じることによって，その論理自体は問われない仕組みになっているのである。つまり，なぜ奇妙な修行をするのかという点やなぜ犯罪を犯したのかという点は問われず，そのような報道をする根拠は疑われる余地がないままとなる。しかしまた暗黙のうちに「反社会性」が「非社会性」で説明され，「非社会性」が「反社会性」で説明されるという閉じた構造であるがゆえに，われわれ視聴者がオウム事件をなんとなくわかったような気になり，理解しやすかったと感じたのだといえるかもしれない。

これまでニュース番組とワイドショー番組の内容を比較し，この二つが類似や収斂の関係というよりはむしろ，オウム事件の異なる側面を強調することで，両者が相互参照の関係にあることを検討した。しかし本稿では，一体なぜそうなるのかという点についてまでは考えられなかった。またオウム報道という問題では，テレビだけではなく，新聞や雑誌など他のメディアとの関係についても考慮しなくてはならない。それは今後の課題としておきたい。

注

1）TBS 系情報番組「ブロードキャスター」のコーナー「お父さんのためのワイドショー講座」がまとめた過去10年間の民放テレビ各局のワイドショー話題別放送時間ランキングは以下の通りになった。1位オウム真理教事件，2位天皇ご一家，3位花田家の人々，4位統一教会騒動，5位サッチー騒動，6位和歌山カレー事件，7位神戸児童連続殺傷事件，8位阪神淡路大震災，9位羽賀・アンナ愛と別れ，10位ダイアナ元妃愛と死。1位のオウム真理教事件は総計1474時間21分14秒と圧倒的で，2位天皇ご一家（約683時間）を大きく引き離した（2000年12月26日　産経新聞より）。

2）たとえば，亀井　淳　1995年「毒ガスとオウムの日々」（『放送批評』7月号），原口和久　1998年『メディアの始末記 TBS ビデオ問題』新風社，江藤文夫　1995年『オウム報道』かもがわ出版，浅野健一・山口正紀　1996年『無責任なマスメディア』現代人文社などがある。

3）ロス疑惑事件では，1984年週刊文春が「疑惑の銃弾」とのタイトルで連載したのをきっかけに，各マスコミが保険金殺人疑惑として，'81年米国ロス市内で起きた「Gさん殴打事件（8月）」と「Gさん銃撃事件（11月）」をいっせいに報道した。'85年9月，警視庁が殴打事件の殺人未遂容疑で夫のH被告と知人の元女優を逮捕し，'88年10月には銃撃事件の殺人容疑でH, I両被告を逮捕した。グリコ森永事件では，'84年から'85年にかけて，怪人21面相と名乗る犯人が商品に青酸ソーダを混入したと脅迫状を送り，商品が店頭から消える事態となった。脅迫状はグリコ，森永，不二家など各食品会社に35通送られた。そして突然終息宣言が郵送され事件は終結した。

4）同様の指摘は他にもあり，坂本衛は，一連のオウム報道について，「報道系の番組が，ますますワイドショー化してきたことも，特筆すべき問題である」（坂本1995：23頁）と述べている。蟹瀬誠一もオウム報道では，「アリが角砂糖に群がるようにひとつのテーマに集中するメディア・スタンピード（集団暴走）あるいはパック・ジャーナリズム（群衆心理型の報道）現象があり，視聴率稼ぎに狂騒するテレビニュースの“ショー化”があるのは誰の目にも明らかだ」（蟹瀬1996：25頁）と指摘している。

5）萩原の分類によると，「ソフト」は「行事・風物」，「気象・天気」，「スポーツ」，「文化・芸術・教育」，「芸能」，「科学・技術」，「生活・家庭・料理」，「話題」となり，「ハード」は，「政治」，「経済」，「外交・国際関係」となり，そして「バイオレント」は「軍事・防衛・戦争・革命」，「犯罪・事件・事故・裁判・災害」となっている（萩原1999：13頁）。

6）録画の不手際で，途中から始まるものや途中までで終わる日もあり，欠如している放送日も若干ある。なお録画テープ等の資料の提供には，甲南女子大学芦田徹郎教授にご協力いただいた。

7）扱った資料は，TBS 系列の熊本放送 RKK で放送された『ニュース23』であり，東京で放送される番組の後半30分がカットされている。ただし，特集がある場合は延長して放送された日もある。

8）1989年 TBS のワイドショー番組『三時に会いましょう』がオウム真理教を取材，当時オウムを批判し被害者弁護団の団長だった坂本弁護士のインタビューテープを放送前に教団幹部に見せ，放送を中止していたということが，1996年に報道された。TBS は坂本弁護士事件を捜査していた東京地検の要請に応じてインタビューテープを任意提出。1996年に国会の通信委員会で社長らの参考人招致が行われ，社長は辞職を表明した。またそこにいたるまでの TBS の社内調査が杜撰であり，報道機関としての責任感と真摯な対応が欠けているとして更に社会的に批判された。

9）内容分析では，カルチュラル・スタディーズの分野で多くの研究がなされている。しかしそれらの多くは，ドラマや CM を題材としたものであり，ジェンダーや人種といった差別構造を問題としたものである。それらの研究は，今回の問題関心からははずれるため扱わなかった。また，ニュースとワイドショーという対立自体が，日本的な文脈であるので，海外の文献はあまり参考にならなかった。

10）ここでの内容は，『ニュース23』3月24日“教祖の反論「薬品はサリンとは無関係」”と『ニュース23』4月18日“検証「サリン容器」”のなかで放送された。以後放送された番組を表記する際には，『23』3・24教祖の反論「薬品はサリンとは無関係」とする。『スー

パーワイド』の場合は『ワイド』とし，同様に『番組名』，日付，キャプションの順に記す。

11）放送された番組内容から引用したものであり，引用文中の下線，（　）はすべて筆者によるものである。引用文の上の（　）内は番組名，放送日，キャプションの順に記してある。

12）インタビューの人数は日によって異なり，単独の場合もあれば複数の場合もあった。しかし身元がわからないようにテレビ局側がモザイクやボイスチェンジャーを使用しているため，複数の元信者の証言が，別人のものであるのか同一人物のものであるのか判断が困難であった。ここでは元信者の証言が番組内で取り上げられた日数のみを示すことにする。ただし，明らかに同じ発言が繰り返して取り上げられ，同一人物による同一の発言であると特定できる場合は，最初に放送された日のみを数え，重複している日は数えないこととする。また，表2のインタビュー対象者の比較についても同様の数え方とする。

13）『ワイド』3・31　衝撃告白！オウム元信者が語る教団内部の実態！！，『ワイド』4・10　人骨発見！？サリン疑惑のオウム真理教連日の捜査で新事実続出！，『ワイド』4・14　監禁・薬物投与！オウム教元女性信者が恐怖体験告白

14）『ワイド』4・5　驚異の頭脳集団オウム真理教科学班の実態！

（『ワイド』5・4　闇の実行部隊トップ“表と裏”その素顔追跡！）

ナレーター：オウム真理教の闇の実行部隊を率いるJ（放送は実名）容疑者。25歳の若さでリーダーとなった彼は一体何を求めてオウム真理教に入信したのだろうか。

レポーター：J容疑者は京都市西部の閑静な住宅街のこちらの家で育ちました。両親と兄の4人家族。幼い頃から成績もよく，礼儀正しい少年だったということです。出家してからはここに帰ることもなくなり，現在この家には両親と兄の3人で暮らしているということです。

近所の人（女）：お母さんがちょっと体弱かったんかね。ゴミも毎日，ゴミの時は出してね。前の川が小川みたいな川だったんですよ当時。みんなで遊んでるとね，よくボールがはまったり，物が落ちたりすると僕ひらいますーっていうて，網持ってきてね，すくってみたり。ほんとにいい子でしたよ。

近所の人（男）：あの子がってなもんや。あんな大人しい礼儀正しい子がそんなことすんのかいな。

ナレーター：中学時代は勉強もよくでき，サッカー部に所属。スポーツも万能だったという。しかし当時から宗教や神秘的なものに興味を抱いていたようだった。

中学の卒業文集：毎日電車に押し込まれ，心さえも失い，ちっぽけな金にしがみつき，ぶら下がってるだけの大人達。子供の頃の夢は時と人波にけずられ，モロモロになり，街角に転がっている。この世の中では本当の自分は見つけられない。

レポーター：中学を卒業後，J容疑者は京都市内でも屈指の進学校でもあるこちらの私立高校に進学しました。翌昭和61年，高校2年生の時にオウム真理教に入信。学校内でも麻原教祖の写真を持ち歩くなど，かなり深くオウム真理教の教えに傾倒していった。

15）『23』5・8　オウム真理教ロシア軍「精鋭師団」と軍事訓練

（『23』5・8　自衛隊勧誘の目的）

筑紫哲也：スタジオに下里正樹さんにおこしいただいてます。下里さん，ほんとにこれがほんとだとするとゾッとする話なんですけど，オウム真理教が自衛隊関係者に積極的にアプローチしたというその主な目的ってのは何ですか。

下里正樹：私は1990年にですね，オウム真理教が衆議院選挙に進出した。そのときからオウム真理教は単なる宗教集団ではなくて，政治結社になった。その政治結社になると同時に軍事集団化していったと。その軍事集団化する上で，強力な武器を入手して同時に戦闘技術を身につける。そのためにですね，積極的に自衛官の勧誘を行ったのではないかと思われます。

筑紫哲也：なるほど。もちろん自衛官といえども信教の自由があるわけですから，信者であろうとそのことは問えないんですけど，信者になった人たちが教団内部では実際どんな役割を果たしていたのか，何を期待されていたのか。

下里正樹：私はあの，三つあると思うんですね。一つはBC兵器ですね。生物化学兵器。そういう兵器のノウハウ，技術文献を含む自衛隊のまる秘の文書，そういうものをオウム真理教に流出させる，持ち込むですね。もう一つはですね，銃火器の訓練を含む戦闘訓練ですね。それは空挺部隊出身の自衛官なんかがインストラクターになって，教師役になって信者を鍛える。それから三番目にはハルマゲドンですね。やがて来る大戦争，内乱ですね。反乱。これに陸，海，空の三分野の中堅幹部を押さえることによって，あわよくば部隊規模の決起を促すと，その三つの点にあったのではないかと思います。

16）『23』5・12　オウム戦車にも乗っていた

池田裕行：これもJNNのスクープです。オウム真理教の信者がロシアの精鋭部隊で射撃訓練を受けていたというのは先日お伝えしました。けれども，同じロシアで戦車に乗った演習も行っていたとグラシャフ国防大臣の側近が証言しました。モスクワ支局の成合記者からの報告です。

成合記者：証言によりますとオウムのメンバーは内務省管轄の師団の射撃訓練のときと同じく会社の警備のため講習を受けたいとロシア国防省に申し入れ，現場では外国人ジャーナリストの一行という別のふれこみで戦車に乗るなどしています。

国防省幹部：メンバー達は白兵戦や護身の技術を習い，射撃場でも時間をかけてすべての銃火器を使った訓練をした。要望にはすべて応じた。戦車や装甲車を使った訓練もさせた。

成合記者：オウムの日本人メンバーに対する戦車や

装甲車の操縦の講習は国防省機甲部隊管轄で，新しい兵器の性能テストなどに使われるモスクワ郊外のクビンカ試射場で，また白兵戦などの訓練はロシア軍タマンスキー師団のアラビノ訓練場で去年秋に行われました。当時の事情を調べた国防省の高官の話では，現場にやって来たとき一行は中が見られないよう窓を暗くした車を使い，ボディーガードもつけ，関係のない部隊の隊員には素性をわからないように常に警戒していたということです。タマンスキー師団での講習のさいには師団の撮影クラブのメンバーがこの日本人達の講習を撮影しようとしたものの，一行から拒否されたという話もあります。

国防省高官：彼らは現場では自分たちを外国人記者団と紹介し，自分の国の政府高官と一緒に戦車に試乗したいのだと語っている。しかし申請したときの訓練の理由は会社のビジネス上必要だった。

成合記者：国防省管轄の施設での外国人の訓練はこれ一回限りで，クビンカ試射場やタマンスキー師団以外では行われていないということですが，問題は国防省内で誰が最終的に訓練の許可を出したかです。私たちの取材に応じた国防省の高官もその点については，省内でも参謀本部内でもオウム訓練の許可について公式にどこかで討議されたことはないとして口をつぐんでいます。ただし一方でこうした問題は現場の連隊や師団のトップでは許可できないとも証言しています。また現在，最高検察局がもっているオウムの教団リストにはわずかだが軍人の名前があると認めた上で次のように指摘しています。

国防省高官：すべての問題を解決するにたる役割を果たしたのは金，大金だ。

17)『23』4・26　下里正樹のオウムの自衛隊浸透作戦

18)『ワイド』4・11　衝撃新事実「KGB 教本」大量購入ロシア射撃ツアーの実態

(『ワイド』4・12　七尾港→ロシア極秘海上ルートも存在か？)

ナレーター：先週末から姿を消していたオウム真理教の幹部が北陸で次々と発見されている。一体なぜ北陸に集まったのか。オウム真理教と北陸にはどのようなつながりがあるのだろうか。ここへきて，新たな事実が浮かび上がってきた。石川県の穴水町で八日オウム最高幹部である治療省大臣のK（放送は実名）容疑者が逮捕された。また目黒公証役場事務長（放送は実名）拉致事件で指名手配中のO（放送は実名）容疑者の指紋が残されていたことから，石川県に潜伏していたことが明らかとなった。だが，なぜ穴水に潜んでいたのであろうか。

レポーター：この町にはオウムの教会とかあるんですか。

近所の人：いえ，まったくありません。

レポーター：貸別荘にきてるということなんですけどね，前からオウムの信者ってのはこの辺に来てたんですか。

近所の人：いえ，この辺ではオウムの信者はいないってことで，まったく見かけたことはありませんね。能登半島で貸別荘という形では，能登半島ではこの町の捕まった根木地区以外は貸別荘というかんじで潜伏できるところはあそこしかありませんからね。我々も気がつきませんでしたけど。

ナレーター：穴水の近くには七尾港があり，多くのロシア船が出入りしている。あるいはそのロシア船を利用して関係の深いロシアへの逃亡をはかったとも考えられる。そのために姿を消した幹部たちが石川県に集まったのだろうか。

19)『ワイド』4・27　徹底取材！謎に包まれたオウム自衛隊浸透作戦！

ナレーター：次々と逮捕される教団幹部たち。しかし未だに組織の実態は謎に包まれています。ロシア軍に接近し自衛隊にも現役，OB あわせて数十人もの信者がいると言われます。どのような目的があったのでしょうか。3月22日史上空前の捜査員を動員して行われた強制捜査。この日上九一色村の施設から救出された信者の中に元自衛官の A さんがいました。関西出身で元陸上自衛隊隊員。オウム真理教に入信し出家した彼は 100 キロ近い体格と自衛隊での経験を見込まれて，麻原教祖のボディーガードをつとめていました。そして去年脱会を決意した A さんを教団が拉致監禁。このとき支部に送られてきた FAX には A さんに無間地獄を見せるという言葉とともに麻原教祖の自身の署名があったのです。

A さんの家族：あんまり記憶がないんで。あんまり話したがらないとこもあるんですけど。色々あったみたいで，ちょっと弱ってた。筋肉がないんで。

レポーター：筋肉がないっていう？

A さんの家族：痩せたりとかして，体が痛いとこもあったみたいで。

20)『ワイド』4・6　追跡！消えた麻原教祖（40）“豪遊ツアー”発覚！！

(『ワイド』5・9　極秘入手！仰天！麻原教祖の接待マニュアル)

ナレーター：警察の捜査の手がついにオウム真理教の頂点，麻原教祖に及ぼうとしている今，教団内の尊師接待マニュアルを TBS が独自に入手した。ホテルの手配から食事のメニューにいたるまでそこには最大の VIP への接し方が事細かに書かれてある。はじめて公開されるオウム真理教尊師接待マニュアル。信者にとってどれほど大事な人か十分に伝わってくる。宿泊について見てみるとホテルはデラックスを強調し，ツインルームもしくはダブルルームを指定。新幹線はもちろんグリーン車。飛行機はスーパーシート。もちろんどちらも禁煙席である。食事にはアッと驚くメニューが指定されているのだ。

（途中略）

ナレーター：P（放送は実名）外報部長はしっかり栄養管理されているというメニューはさすがにこだわりがある。ホウレン草を使わず小松菜を使う指示があるのは，小松菜の方が鉄分を摂取しやすいからだ。そして最大のこだわりは教祖の大好物のメロン。毎食必ず登場。何はなくともメロンなのである。

レポーター：ご飯に何をかけてらっしゃるんですか。

男性信者：甘露水です。先生が使用された水なんですけれども，大変エネルギーの入った修行のためになるようなエネルギーの入った水ですね。それを甘露水と言ってますけど。

ナレーター：信者と教祖とはいえ，その食事のメニューはあまりに違いすぎはしないだろうか。さて，大阪，名古屋以外の支部へ教祖が訪れた場合，ホテルの部屋は豪華なツインルームまたはダブルルームと決まっている。部屋は明るく広々としていなければならない。

21)『23』5・15　諜報省トップ逮捕，『ワイド』5・15　大菩薩峠！J容疑者（放送では実名）逮捕でオウム秘密ルート発見！

22)『23』4・13　オウム最終戦争予言の意図，『23』4・20　オウム特殊兵器をユーゴで研究

23)『ワイド』3・24　新展開！オウム真理教薬物大量押収心臓部に化学工場！，『ワイド』4・27　中継！Q容疑者（30）逮捕！オウム“絶体絶命”，『ワイド』5・15　ついに逮捕！裏の実行部隊J容疑者数奇な運命の光と影!!

24)『23』4・25　宗教法人法見直し？

25)『ワイド』3・24　なぜ続発オウム真理教トラブルの歴史，『ワイド』4・13　悲痛な叫び！息子よ…娘よ…幹部の肉親涙の告白！
（『ワイド』4・14　早く自首して！オウム幹部R（放送は実名）の母涙の告白！）

ナレーター：オウム真理教の研究施設の大量の薬品類の責任者でもあるR氏に疑惑の目がむけられている現在，その母親はその姿をどう見つめているのだろうか。

母親：早く出頭してもらいたいですね。何よりもまずそれですね。出頭してもらってね，ありのまま白状して処罰を受けてもらいたい。

レポーター：やはりお母様も息子さんが何かに関与していたんじゃないかと。

母親：今の状態を見てますと，どうしてもそう思いますね。

レポーター：子どもの頃というのは非常に真面目なお子さんだったんですか。

母親：真面目でした。

レポーター：入信したときっていうのは，前兆みたいなことってあったんですか。

母親：全くそんなことなかったんですよ。超能力とか解脱とかそういうことを体験したいがばっかりに麻原さんと出会ってしまったということですね（泣く）。

参考文献

現代人文社編集部　1995年『検証！オウム報道－今回だけが例外なのか』現代人文社

萩原　滋　1992年「テレビにおけるニュース報道の分析－午後6時台と9時以降の番組比較を中心に」（『慶応義塾大学新聞研究所年報』38号）

萩原　滋他　1999年「変容するメディアとニュース報道－テレビニュースの娯楽化傾向の検証」（『メディアコミュニケーション』49号）

飯室勝彦他　1995年「オウム・サリン・メディア」（『新聞研究』528号）

石田佐恵子　1998年『有名性という文化装置』勁草書房

亀山純生　1996年『離脱願望－唯物論で読むオウムの物語』労働旬報社

蟹瀬誠一　1996年「テレビの現場から見たTBS問題」（現代ジャーナリズムを考える会編『テロリズムと報道』現代書館）

川邊勝朗　1997年『報道のTBSはなぜ崩壊したか』光文社

村上春樹　1997年『アンダーグラウンド』講談社

村上淑恵　2002年「テレビのなかの“オウム真理教事件”（資料）」（『甲南女子大学研究紀要　人間科学編』第39号）

村上直之　1990年「マスメディアと逸脱」東京大学出版会（『講座社会学　逸脱』）

大塚英志　1992年『仮想現実批評』新曜社

坂本　衛　1995年「オウム特番合戦に狂奔したテレビの功罪」（『創』1995年7月号）

玉木　明　1996年『ニュース報道の言語論』洋泉社

Tuchman, G 1978 Making News The Free Press（鶴木　真・桜内篤子訳　1991年『ニュース社会学』三嶺書房）